

〔翻 刻〕

『寛永以前落首』

加 美 宏

水府明德会彰考館蔵『寛永以前落首』（写本一冊）は、『平治物語』『平家物語』から『寛明事蹟録』『文会雜記』に至る十七の軍記・雜記の類から、六十四首の落首を抽出したものである。落首の対象となった戦乱・事件は、平治元年（一一五九）の平治の乱（『平治物語』）から、寛永十四―十五年（一六三七―三八）の島原の乱（『寛明事蹟録』）におよんでおり、書名はそのことを表している。享保六年（一七二一）の序を持つ『兵家茶話』を引いているから、成立は寛永よりもだいぶ後で、江戸中期頃であろうか。奥書などもなく、編者もわからない。

この時期の数多い落首の中から、六十四首を選んで抜き書きした意図や選択基準も明確ではない。例えば、『太平記』には、二十七首の落首を載せるが（古態の玄玖本・古活字本）、本書は、卷三・六・七・十四・十六より各一首、計五首を採っている。この五首は、楠正成や建武新政にかかわり、いずれも人口に膾炙したものだといつてよからう。この人口に膾炙したポピュラーなものというあたりが全体の撰択基準かと思われる。つまり本書は、軍記類の著名な落首を一覧するための選集というべきものである。

しかし、本書は、こうした便利な落首選集であるということのほか、これまでの落首研究には採りあげられなかったもの、出典の現行テキストと異同の存するもの、落首の範疇に入るかどうか議論のあると思われるもの（細

川幽斎の道歌―『兵家茶話』などをふくんでおり、軍記研究・落首研究に一つの資料を提供している。

また、短歌形式の落書について、中世では「落書」「狂歌」と呼んでおり、「落首」と呼称した例は見当たらないようである。中世の古辞書類や『日葡辞書』などにも、「落首」の語は見えない。「落首」の語の初出は、『梅津政景日記』寛永七年八月二日条や、寛永頃の古活字版『竹斎』下巻あたりと考えられる（井上隆明氏「落首文芸史」参照）。つまり寛永年間には、「落首」の語の登場・流布する時期にあたり、そういう意味でも、「寛永以前落首」という把え方に興味が持たれる。さらに、いわゆる戦国軍記も、この寛永年間前後あたりまでに、ほぼ形成されており、落首の主要な載せ手であった軍記物の終焉期と、だいたい重なる時期であることも注目されるのである。

なお、これまで本書について言及されたのは、管見の及ぶところ、高橋喜一氏「落書・落首―中世狂歌論・その三―」（『芦屋ゼミ』第三号、昭52・9）ぐらいであり、あまり知られていないように思われるので、ここに翻刻を思い立った次第である。

次に本書の書誌的事項について、簡略に記しておきたい。水府明徳会彰考館蔵（巳十一一〇七一六九）。写本一冊。縦二十三・六センチ、横十六センチ。題簽なく、表紙左肩に直書きで、「寛永以前落首」、扉の表左肩に同じ扉題がある。表紙は堵紙、素鼠色地に黒の格子縞。袋綴。墨付十六丁、うち扉一丁、本文十五丁、遊紙尾一丁。一面九行、落首二行書き。一筆書写。奥書なし。

翻刻に当っては、次の諸点に留意した。

一、底本に忠実であることを原則とし、宛字・傍書・清濁など、すべて原文のままとした。誤字と思われるものも「ママ」と傍書して原文に従った。

一、ただし読み易さを考慮して、異体字の類は通行の文字に改め、詞書の部分には句読点・中黒点を付した。

なお、本書の閲覧・複写・翻刻に関しては、水府明徳会彰考館長池上宗義氏、館の皆様、種々御配慮をいただいた。

た。記して感謝申し上げる。

寛 永 以 前 落 首

平治物語三

長田忠宗尾張へ逃下る時、落首

落行けは命計は老岐守其おはりをはきかまほしけれ

長田父子を誅せらるゝ時

きらへとも命の程は老岐守みのおはりをは今そたまはる

かりとりし鎌田か首の報にやかゝるうきめを今は見るらん

平家物語五

清盛都を遷す時

さき出る花の都をふりすてゝ風吹はらのすへそあやうき

源平盛衰記三十七

木曾殿の獄門の木に

信濃なる木曾の御料に汁かけて只一口にくろふ義経

那須与一扇の的を射る時

扇をは海のみくつとなすの殿弓の上手は与一とそきく

同四十六

堀川の門の柱に

義経はさてもと見つる世の中にいつくへつれて行家をさは

太平記三

笠置の軍に高橋又四郎抜かけして逃る時

木津川の瀬々の岩波早ければかけて程なく落る高橋

同六

須田・高橋、楠に負て逃る時

渡辺の水いかはかり早ければ高橋落て隅田流るらん

同七

千早の寄手の大将の陣へ

よそにのみ見てややみなんかつらきの高まの山の峯の楠

同十四

壁書を決断所に押れたるに

かくはかりたらさせ給ふ綸言の汗の如くになど流るらん

同十六

楠か首をかけたる時

うたかいは人によりてそのこりけるまさしけなるは楠が首

続太平記四

都の内裏の日華門の傍に高札を立

むかしより守の神の末遂て二王立とそ成にけるかな

仁王の二王になりし世の中はうともうんともいはれさりけり

同二十四

斯波家の家督大野修理大夫義種の嫡男義敏、又渋川治部大輔義廉と争論す。伊勢守、義敏を推挙す。伊勢守の妾と義敏の妾と姉妹なり

此程はめにてまかるゝ伊勢守鮎となりてや口にのるらん

後太平記九

尼子家十勇の士尤道理介・秋宅庵介敗軍の時

秋やけておちば尤道理の介いかにいほりを春やけにする

尼子方山中鹿介と毛利方品川狼介と場中の勝負の時、鹿介終勝つ

狼か鹿にとらるゝ世となれば負色みゆる勝久の陣

大坂門跡、信長方より近く詰の城まで攻込れ、念佛の息短く、ナマ鯛くと唱へたれば、

一向に仏の御名もなまくさしとなふ念仏なまだいとなる

一向宗の門徒、鯛を阿弥陀魚といへるとて喜ひけりとなり

鎌倉管領九代記六、政氏の条

三浦義意か首、三年まで不死、駿州久能の総世寺の禪僧、首の傍に一夜坐禪して一首の歌を読しかは、忽肉たゝれて白骨となれりとぞ

うつゝとも夢ともしらぬ一眠り浮世のひまを明ほの空

同九、義氏の条

上杉謙信鶴岡拝賀の時、成田長康か下馬せざるを咎て鞭にて打落しければ、成田面目を失ひ、忍の城へ帰りければ、謙信一首読けり

味方にも敵にも成田早く殿長康刀きれもはなれす

鴻の台合戦に里見方敗軍しければ、太田三楽・同源六東西へ別れ落行ければ

よしひろくたのむ弓矢のい義弘わつきてからきうきめに太田岩みのはて美濃守

信玄駿河へ押入り、今川氏真を追ひ出して国を取る。氏真は信玄の甥なり

甲斐もなき大僧正の官賊か欲にするかのおいたほすみよ

謙信没後、景勝・景虎国を争ひ、景虎滅亡す

無常やな国を寂滅することは越後の鐘のしよぎようなりけり

いといこしいもせ逢ふ夜の中ならて国にわかれの鐘の音そうき

此時、景勝甲州へ金を賜て加勢を勝頼に乞ふ

重編応仁記の内、応仁前記

足利將軍義教公、赤松満祐に弑せらるゝ時

赤松は伊豆に播磨を取られしと御所の頸をは嘉吉元年

御所様のけふりとならせ給ふこと只赤松をふすべしか故

同応仁広記一

武衛家、子なくして一族大野修理大夫持種の子義敏を家督とす。義敏、三家老と不和故、將軍家より御勘氣を蒙り、三家老、武衛の一族渋谷義廉を取立、家督とす。義廉は山名宗全の智なり。又伊勢守の妾と義敏の妾と姉妹なる故、其縁にて義敏を伊勢守推挙しければ、大に騒動起る

義敏は二見の浦のあまなれや伊勢のわかめをたのむはかりそ

世の中はみな歌よみになりひらの伊勢物語せぬ人そなき

くみおきしたけの力他家竹のつよければ張すましたる渋谷こかな

河内守護代遊佐河内守長直、政長方にて義就に恐れ、奈良の筒井法橋か許へ落行ければ

筒井筒いつゝにかゝる遊佐殿は只業平の姿なりけり

義就、山名か取なしにて赦免せらる

右衛門佐いたゝくものか二つあり山名か足と御所の盃

畠山政長・畠山義就御霊社合戦に、政長、細川勝元へ使を遣して酒をこふ、勝元鎬失を一筋贈りける、政長其奥意をさとする

古具足ごりやうまできて尾張殿細川きしを頼むはかなさ

細川のみなせをしらて頼みきて畠山田はやけそはてたる

無性なるたけを頼みて尾張籠くむより早くふちをはなるゝ

同二

何者か山名方へ矢文を射る

うでなくはやめよ山名の赤入道手つめになれば御所を頼みぬ

同四

細川方骨皮左衛門尉道源、稻荷山にて打死す

きのふまでいなりまわりし道源をけふ骨皮となすそむなしき

同続応仁後記十

信長は近代無双の執權なりといふ。然れども京童ども

なからへは又信長やしのはれんうしとみよしを今は恋しき

武田三代記十四

駿府の城攻に縄無理介進み兼たるに

無理介道理介と名乗るへし無理なる事をする身でもなし

信長記一ノ下

信長公、將軍家再興の時、芥川・小清水・余山・皆瀬過く時、三好日向守・篠原右京亮・細川三郎退散す

落去ていつくにちりを芥川さらにうき名を流す細川

天正十年信長、甲州へ打入の時、高遠城落去

勝頼と名乗る武田の甲斐もなく軍にまけてしなのわるさよ

文禄清談

命松丸、楠正行か墓にて

楠か跡の印をきてみればまことに石となりにけるかな

東国戦記上

多賀党の臣赤松安大夫、後に古沢と改む、关戸勢と合戦の時

赤松か左文字の刀ふりければ皆紅にふるさわの水

野に木村内田石浜古沢の血塩におそれ降る落合

老人雑話

美濃の土岐、斎藤道三に追出されたる時

ときはれはのりたちもせぬよのはかまみのはやふれてひとのにそなる

兵家茶話

細川玄旨、示家臣十一首

寄合善朋

正直や能は物書学文し貴人年よりよそを見し人

寄合悪友

けんくわずき威言広言空言や人の中かき公事好む人

葉成者

朝起や身を働かし小身に師親をちかく灸をたやすな

毒成者

酩酊に飽満昼寝遊山すき親を不孝に主人くわんたい

人被讃者

にほやかに心をしめて氣立よくいんぎんなるそしく者はなし

人被憎者

随意にて物しり顔の指出口追従ありて自慢する人

物成者

算勘や有力武芸世上かた公儀才覚身を立る人

物不成者

破家無力病者述懷わやく者引込思案油断不氣根

氣高被見者

大様に慈悲ふかくしておとなしく物にあたらぬ人そゆゝしき

下劣被見者

売買に直段つめして欲ふかく身持たてなる人はげびなる

無事被見人

何もたゝ心をすぐにうそいわで主をうやまい義を立る人

十一首

此歌を信仰ありておほへなは二世安樂の縁となるへし

武家盛衰記三

一万石 島左近允勝猛

治部少に過たる物か二つあり島の左近に佐和山の城

同十二

四十七万四千石 備前黄門秀家卿

此卿四人の家老を打籠めし時

打わりて継がれぬ物は備前鉢つかふ者にも用心をせよ

同二十二

一万石 駿州興国寺天野三平康景

三奉行の歌

箱崎の松に奉行はさも似たりすぐなる様でまがらぬはなし

寛明事蹟録上

寛永十三年十二月二十四日、天草にて落書

上使とて身は島原に板倉の武道の心更に内膳

御目附と我を顔なる十蔵かかれとふけとならぬ石貝

伴天連に細川舟を乗取られ甲斐も渚に逃て川尻

一番に心竹束仕寄つけ武辺の名をは四方に立花
下帯をたらしとしたる心故人の尻にはつく有馬殿

文会雜記

秀吉公、肥前の名護屋在陣の時、度々朝鮮へ御渡海の沙汰ありけるに、曾呂栗が歌一首読けるに、秀吉公御読ありて、太閤がとは呼び輕しめたる、読給なりと伝ければ、曾呂栗、君か代はとは天子の事を申候と申ければ、秀吉公何とも徒なかりけるとなり

太閤か一石米をかいかねてけふもごとかいあすもごとかい